

「人が認識する」という事に関する大変面白いエッセイです。

私は目下 AI (人工知能) について思いをめぐらせています。AI は至る所で使われたり、議論されたりします。しかし、本当に人間が持つ知能に等しいあるいはそれ以上のものができるのか、今の技術的なアプローチが正しいのか、悩ましいです。

そこで、「哲学史入門 (NHK 出版新書)」を買いこみ齧ってみました。その結果は後程紹介する事にし、まずは私の疑問を書いてみます。

- 人の成長と知能の発達過程に AI 技術を比較してみます。
 - 生まれたての赤子—母親の顔を覚える—人見知りする様になる。
 - 1 歳児—言葉を理解し話始める—公平感をもつようになる。
 - 4 歳児—物事の善し悪しを判断できるようになる。
- 現在の AI 技術手法を上 に述べた項目と対比すると次のようになります。
 - 顔を覚える—画像認識 (特徴点を抽出しデータ化する)
 - 人見知り—自分にとってこの顔の人は優しいかどうかをデータとして覚えさせる。(ここでは「判断」が必要になる。判断とは基準と比較し、その基準を超えれば「優しい人」という判断を下す。
 - 言葉を理解する—昨年から爆発的に広まった ChatGPT がいかにも言葉を理解している様になってきた。この「理解」が問題だと思っています。
 - 物事の善し悪しを判断する—AI は与えられた「基準」に従って行動する。人は様々な経験から、自らの「基準」を作り出す。

私には今のような開発を続けても、AI が人間の持つ知能に到達することはない、と感じます。

それは「理解する」事の本質が解明されていないし、「規準を創り出す」メカニズムが解明されていないためです。

さて、それでは哲学者たちは「人が認識する」ことについてどのように考えていたのでしょうか。ギリシャ哲学ではものごとの本質を一気に掴むのが「知性」であるとしていました。しかしカントは人間にそんな能力はなく、「概念」を使って理屈で考えるしかないと言き、それを「悟性」と呼びました。また、推理・推論する能力を「理性」と呼びました。これらの能力は現在のところ AI で実現できているとは思えません。

もしも、人を凌駕する人工知能ができたなら、それは核開発以上に人間を不幸にするに違い有りません。

我々は AI 開発の危険性を十分理解して、監視することを怠ってはなりません。